新『おみね甚ひことを爲るな、頸部がピリ〳〵するぞ』
みれ『モー此位にして置きませう、永く使つて居ると毒になります
から』
いろ〳〵な事を云ひます、糊のこわひ浴衣を着ました新三郎は快
心持になつてすりかへられたはと知らず胴卷を肌に付けましたが、
今被た浴衣は經帷子か今使つた行水は湯灌代りにせられたのか神な
らぬ身の露知らず、そのまゝ置へ入る、両人は喜こんで後を取片附
けて自宅へかへッて來ました、
伴『おみね巧く行つたなア』
みれ『伴藏さん今日のやうな心配した事はないよ。頭を押へ付けて
居る内に早くお前が取つてくれゝば宜いと思つて』
伴『俺れもおどろた』
みれ『鳥渡觀音樣を御見せ』
伴『之だ何うだへ、まぶしい位だ、金無垢だせ、大したものじやな
いかエ、夫に今夜百両の金が儲かるんだ、本統に上首尾だナ、そ
れは然うと大變なことが出來てしまつた』
みれ『何が大變だへ』
伴『旦那が之を持つて居ては傍へ倚ることが出來ぬから取つてくれ
ろと頼まれたのだ、俺が此像を持つて居ては、一件が今夜俺の傍
へよれぬ、百両の金を持つて來ても貰ふことが出來ぬ、厄介な物

を取つた」

みれ「困つたねー、捨て、御出な」

伴「捨てるのは勿体ない、第一足が付じやないか困つたなア、よし斯ふしやう裏へ持つて行つて埋て置かふ、ソレへ印を置いて、金を取つてから掘出せば可い」

みれ「い丿所へ氣が付いたね、夫では然うして隱してお置き」

是から伴藏が裏手へ參りまして畠の傍の所を掘つて之を埋めました。慾と云ふものは恐ろしいもので、今夜は百両貰へるから、早く來れば宜いと待つて居る、八ッの鐘を打ち切ると二人が百両の金子を持つて參りました、伴藏がお札を剝す、竟に新三郎が果敢ない最

後を致しますると云ふ、此話は長いものでございますが、牡丹燈籠の由來は之で終りでございます、此後は又編をかさねて申上るとして、今回は茲で止めて置きまする。

吉原怪談 闇の夜烏

＝裏三階の幽靈＝

吉原に舊い暖簾の大黑樓と云ふ妓樓があつた、なか〳〵構へも相當に大きく間口十五間の總三階建で、間數も小さな名代部屋まで加はへると五十近くもあらうか、その内三階にある小座敷の中には曾て一度も未だ使つた事のないのが二つ三つはあるそうであると云ふ

程樓内が廣いのである、であるから未だ年の往かぬ豆ちやんなぞは雨降風間の晩なぞには獨りで三階へ往くのを薄氣味惡いものに仕て居た。

某年の九月の末、彼岸も過ぎて朝晩はモウ薄ら寒い時分、半月の後に迫つた移り替に誰を頼まう目途もなく、唯さへ寂しい秋の心細く、不圖した風邪の心地を幸ひ、大した事もないが見世を引いて、燗部屋に一日二日、味氣なく臥て居た常盤と云ふ此妓樓のおいらんが在つた。

スルト九時頃に珍らしく馴染客のスーやんが來たので起されて、氣は進まなつたが是れも稼業と、ちよいと頭髪を撫で付けて引付座敷へ住つて我が三階の部屋へ入れ、替り臺から引け臺まで入れて可成費はせたが、然のみ異つた樣子も見えなかつたので、移り替は此客に頼む事といろ〳〵水を向けかけたが大引け前、思ら出した樣にプイと歸つたのを殘り惜しく、その歸つた後の蒲團の中へ潜り込んで寢た。

ところが此の晩、夕方から吹き出した風が更けるに連れて段々激しくなつて、三階にはお客の數も澤山は無いので淋しい〳〵で寢そびれた常盤は、いつそ階下の燗部屋の雜子寢の方が好いと三時の時打が廻つてから間もなく、忍び草履を突ッ掛けて廊下へ出た、そうして急いで裏階段まで往くと、降り口の廊下の天井に、いつも煌々

と點いて居る電氣が何うしたものか消えてゐて階段は二階から映す燈火で、やうやく降りられる程の暗さであつた。

處で此の裏階段と云ふのは中程で折れ曲つて居て、下から登つて來る者は、その曲つた處で降りる者と往き違ふやうに、稍や廣くなつ居たのであつた。

常盤は其處まで降りると、二階の明るい廊下が見えるので、ホッとして又降りやうとすると鼠色の壁にピッタリ喰着いておいらんが一人立つて居たので、

常『呀ッ、吃驚した、誰れさお前さんはそんな所に居てゝよ……』

と瞳を定めて視やうと仕たが生憎く此僅な場所だけが特に暗いので

常『厭アねへ、無言つてゐてさ』

常盤は薄氣味惡るかつたが、朋輩の誰かゞ、二階から恰度登つて來て、此處で出ッ會したものだから態と無言つて居るものと合點して、斯う云ひながら暗闇ながら凝つとそのおいらんの顏を覗いて見ると、色は拔ける程白く、鼻の左に黑子のある細面の妓で年盛りではあつたが、不思議やまだ一度も張り見世で見た事のない人だつたしかも其の着て居るものが夜更けにはセルでも寒い九月の末に、藍の勝つた中形の浴衣一枚！

常『鴉母さアんー』

吃驚した常盤は、我を忘れて恁う叫んた、そうして其處から……

二階の廊下へ轉げ落ちて、

常『ウーム』

と許りに悶絶した。

叫び聲に驚いた新造衆のお仲は何事かと打驚き下の新造を起して二人で恐は〳〵聲のした裏階段へ來て見ると、セルの寢間着のまんまの常盤が廊下に倒れて氣絶して居るので我を忘れて、

仲『皆さん早く來て下さい大變ですよ』

皆んなの來る間、お仲は常盤を介抱しながら何氣なく階段を見上げると、折れ曲つた中程の所に、おいらんが一人無言つて立つて居たので、

仲『まア何誰、其處に居るのわ』

立上つて覗き上げたが、まだ相手は無言つて居るので、

仲『厭アくゝへ、氣味の惡るい』

と止せば好いのに氣がもめるので、お仲は三四段トン〳〵と登つて

仲『誰アれッ』

と云ひながらそのおいらんを熟く視ると、忽ち一聲！

仲『キアッ』

と叫んでぐた〳〵。さすがに氣絶は仕なかつたが、廊下にペタンと座つて儘で口も利けず腰も立たず。

騷ぎは是れが爲めに又一入、醫者は來る、お客はみんな飛び起る

樓内はいやもう大騒動であつたが、程なく醫師の手當で二人共正氣付いた。

樓の中は此の椿事の噂さで多くの人は持ち切り遂に廊内の評判となり三月許り後には、此家の三階の裏階段は取潰された。

その夜裏階段に立つて居た妓は丁度三年前の同月同日、それは常盤がまた抱へられて來た半年ばかり前に、此の裏階段の手摺へ扱帶を懸けて、可惜娼妓盛りを縊れて死んだ瀬川と謂ふ陰氣な女が到頭此世を果敢なんで恁うして死んだのであつたとの話であつた。

■上總怪談 猫塚の因縁

――怪猫舊主の恩を報ず――

爰に上總の國夷隅郡金置村の名主喜兵衛と云ふ者の娘に、お春と云つて當年十八才で、古今の美女でございます、裁縫は勿論のこと糸竹の道にもうとからず、誠に溫順な娘でございます。

同じ村に百姓の源兵衛と云ふ人の惣領息子を源太郎と申し、至つて律義者、次男を源次郎と云つて此奴百姓家に生れながら農業が大嫌い、常に手爪先を奇麗にして、小博奕などを打つ、遊惰な者でございます故、村内の者も忌み嫌つて居りまする。此次男の源次郎が

おはるに心を寄せ何卒かして手に入れたいと思ひ居りまするが、中中言ひ寄る事も出來ず如何がしやうと思つて居りますと、丁度江戸表より碁打ちで高橋鎭太郎と云ふ人が來て此の邊を廻つて居ります、名主の所へも出入を致して居り升ゆへ、源次郎は此の先生の弟子となり日々名主方へ出入をするやうになりました、段々お春の樣子を見ると此鎭太郎に思召が有る樣子、此奴は下手なことは出來ないわいと折を伺つて居りました、そのうち何う考へたか、或日の事

源『先生私は友達から戀歌を賴まれましたが出來ないと云ふのも氣が利かぬから、よし書て遣らうと請合つて參りましたが、私には出來ませぬから、貴方に書いて貰つて、私が遣つた積りで持たして遣らうと思ふのですが、一ッ書いて下さいませんか』

鎭『戀歌は至つて六ケ敷、何う云ふ意味の戀だね見ぬ戀、逢ふ戀、あこがれる戀、いろ〳〵有るからね』

源『お前さんの事を思つて居ると云ふ譯なので』

鎭『ハ、ア初戀だね、よし〳〵』

と、筆を取つて短冊へサラ〳〵と認めたのが、

思ふ身は關路の闇の村雲に、
晴らして少しさせよ月影。

鎭『これで宜しい』

源『有がとうございます』

と禮を述べて持つて出ましたが、直に名主喜兵衛の所へ參りました。

源『今日は』

女『おや源次郎さん御出なさい』

源『旦那は』

女『今日は、お隣村の名主の若旦那の所へお嫁入が有りますので、旦那樣がお仲人でございますから事によると旦那もおかみ樣も御泊りになるかも知れませんよ』

源『えゝさうですか、お嬢さんは』

女『奥にお裁縫をしてお出です』

源『御免なさいよ』

と奥へ參りまして、

源『嬢さん、今日は』

春『おや源次郎さんお出でなさい』

源『御一人ですか』

春『今日は父も母も居りませんで、御合憎樣ですね』

源『隣村へお出でだそうですね』

春『さうです、アア彼方で一服お呑りなさい』

源『お嬢さんは何日も御精が出ますね。おやお側に猫が居りますね此猫は妙なブチですなア、赤い紐で胴中を結いた樣ですなア、何時でも此方へ參りますと左樣思ふのですよ、片時でも此の猫にな

りたいと思ひまして」

春「何故です」

源「何時も貴女のお膝の上に乗つて居りますから左樣思ひますよ」

春「あら源次郎さん嫌なことを」

源「夫はさうと私はとうから高橋先生に賴まれて貴女に上げやうと思つて居りましたが、人目が有りますから上げる事も出來ませんでしたが、今日は能い折りで、此の短冊を御覽の上、色よき返事を下さいまし」

と差し出しますとお春は、ハッと顏に紅葉を散らしまして。

春「そんなら先生から此の短冊を妾に下さいましたので」

源「待つて居りますゆへ、御返事を願ひます」

お春は手に取り上げ少し待つて下さいと云つて奥に入り開ひて見ると、

思ふ身は關路の闇の村雲に
晴らして少しさせよ月影。

と書いてある、名主の娘、腰折れの一つ位は出來ますが、イヤ一層おもひの丈を筆に言はした方がよいと、日頃より思ひ詰めた事、心を打ち明けた返り文を認めまして、

春「源次郎さん、夫では是を先生にお上げなすつて下さい」

源「宜うございますが、時にお孃さん、今夜御両親が御留守を幸ひ

先生に御合ひなすつて、何彼とお話しをなさいな」

巻『源次郎さん、何うして先生に逢へませう』

源『今夜四ッの鐘を相圖に、私が裏山の地藏堂に先生を御連れ申して置いて、夫れから貴女を迎ひに參りますから、そこで貴女は私と一緒にお出なすつて地藏堂の傍で先生に御會ひなさいましな』

巻『有がとう、さうできますなら、何分よろしく願ひます』

源『夫れでは、四ッの鐘を相圖に私が向ひに參りますから』

と、源次郎はそのまゝ表へ出ましたが、右の手紙を讀んで見ると驚いた、大層先生に惚れて居る樣子、自分でないから詰らぬ、まてよ これまではこぎつけたが是から何うしたものだらうと考へながら參

りますと、向方より友達の彌太藏と云ふ者が參りましたから、

源『オイ彌太藏ぢやアない』

彌『源次郎か、何か面白いことはないか』

源『有るよ』

彌『なんだ』

源『己れが或人から頼まれて今夜野茶番をやらうと云ふのだが、お前は大そう茶番が上手だと云ふことぢやないか、一つやつて呉れぬか、一分やるぜ』

源『己れは、茶番ときたら旨い物だ、此間も忠臣藏の茶番で、己れが一番を取つなよ』

彌『何をやつたね』

彌『五段目の猪を』

源『詰らぬ役だなア、まア何でもいゝや、一ッ頼むせ一分前金で遣るから』

彌『一分になれば強勢だ、シテ狂言の筋は何んだね』

源『今夜四ッの鐘を相圖に裏山の地藏堂にお前が裸体で這入つてるのだ、すると己れが女形を一人手を引いて來るのだ』

彌『成る程』

源『地藏堂の前へ來て先生〳〵と言ふと、お前がオヽ源次郎かと斯ふ云ふのだ』

スルと己れが地藏堂の狐格子を開けて中に這入り爰が早替りだよ己れの着て居る着物をお前に着せて己れの手拭を冠せると、お前は表へ飛び出し女形の手を取つて、中へポント突き入れて先生御ゆつくりお話しをなさいと云ふのだ、すると己れは其女形の手を取つて中へ入れて、バッタリ狐格子を締るのだ』

彌『夫から何うするのだ』

源『夫で宜いのよ』

彌『何だか狂言の筋が譯らぬ』

源『まア何んでもいゝから頼むよ』

彌『よしそんなことだつたらやらう』

と彌太藏は其夜の四ツの鐘を合圖に地藏堂へ參り中で裸体になつて這入つて居りますと蚊が喰つて堪らぬ、ブンブン、こりや堪らぬ。早く來れは宜いと言つて居りましたが、此方は源次郎、四ツの鐘を合圖に名主喜兵衛の庭口へ忍び込んで雨戸をトン〳〵と叩きますとお春は今やおそしと待つて居りました故、出て參り雨戸を明けて、

春『源次さん』

源『おゝ、お嬢さん、さあお出なさいまし、先生が待つてお出でゝすから』

とお春の手を取つて裏山の地藏堂へ來る、彌太藏はこれを見て、ヤア名主様のお嬢様を引張つて來やアがッた、此野郎ふざけやアがつて、一分で勘辨が出來る物か、己れがなつてくれるからと見て居ると、源次郎はお春を連れて參り、

源『先生〳〵』

彌『馬鹿を云へ此野郎』

源次郎はおどろいた。どなられては大變だから突然、狐格子を明けて中へ這入り自分の衣服を彌太藏に着せ手拭を取つて冠らせ、野暮を云ふな跡で何うにでもしてやるから、と突き出しましたから彌太藏は詮方なく飛出し、お嬢さん先生と御ゆつくり御話をなさいと手を取つて突入れると内から手を出して源次郎が中へ引入れましたが、中の様子は相分りません、……夜明になつて見ると戀しいと思

ふ高橋鎮太郎に非ずして源次郎の爲に肌身を汚されて居たので、ハツト驚き振り拂つて逃げ歸りましたが、両親に云ふ事も出來ず、性惡の源次郎の事なれば此儘には濟せまい、御両親に知られたら何うしやうと日々夜な〳〵胸を痛めて居ります中に思ふ男の鎮太郎は江戸へ歸つてしまい、両親には申譯はなし、一層死んでしまうと覺悟して一伍一什を書き殘し家内の者の寢息を伺ひそつと抜け出で裏の枝川へ南無阿彌陀佛と唱名を唱へて飛込まんとすると、例の手飼の三毛猫が据を喰へて放さぬ様子、

『お、三毛や妾が死ぬ事を知つて止めて呉れるのか可愛いそうに所詮生きては居られません死ぬ替りに、己れやれ源次郎、人に恨みは有物か無い物か、是三毛や暫らくお前の体を借りて必ず恨みを晴さで置くべきか』

と三毛を振り拂ひて夫れなりに、枝川に飛込んで相果てました。

翌朝になると名主の家では娘が居ないと云ふ騒ぎ手分をしてさがすと裏の枝川へ身を投げて死んで居るとの事、両親の歎きは大方ならず、檢使を願ひ吊ひは相濟しましたが、此の書置が有りましたゆへ早速に御地頭様へ御訴へ申し上げました、依つて同村源次郎を早早召捕様にとの御下知でございましたが、源次郎はとくに此事を知つて斯うしては居られないと、直ぐに故郷を出奔いたして終ひました。

そして源次郎は、そのまゝ江戸へ出まして四ツ谷御假屋横町の上總五郎兵衛と申す人入稼業の者が故郷の村より出たもの故その縁を以て尋ねて參り世話に相成つて居りまして奉公口を探して居りました所、四ツ谷新宿新屋舗に御旗本で四百石を領しまする、平岡强太郎の屋敷へ名前を吉平と更へて仲間に込住みました、其年の六月の末、御用人山田作太夫の御使にて二番町木村八左衛門の所まで參り丁度暮方新宿中田甫まで歸つて參りますと俄に雨がザッと降り出しました。

『ア、酷い降りになつたわイ、傘を持つて居て能い事をした』と白張の傘をさして遣つて來ると、後より若し若し貴方と聲を掛けられおどろいて振り返つて見ると一人の女、

女『私は新屋敷まで歸ります者、連れにはぐれてこの俄雨に難義を致して居りますが、貴方のお傘の中へ入れては下さいませんか』

『ヱ、私はどうせ新屋敷まで歸ります故、御一緒に參りませう、さア お這入りなさいまし』

女『有難うございます』

と傘の中へ這入つた女を見ると、年は十八九、鼠縮緬にすがぬい蝶の紋衣類は緋鹿の子と黑の腹合の帶、嶋田髷に赤い切を掛け、御化粧をして、塗つた太履に白足袋を穿き、プンと麝香の匂ひ鼻を穿くばかり、吉平心の中に、ア、美しい婦人だ己れが國に居た時名主

の娘お春さん位い能い女はないと思ひ可愛想に強姦同様な事をしたが、トオドオ身を投げて死んで仕舞つた、それが爲めに國を逃げ出し此江戸へ出て來たのだが、江戸へ出て見りやア又此樣な美しい女が有るんだ世間は廣いものだなと思ひながら、

吉『お嬢さん、貴女は何才でございます』

女『もふいけません十九才でございます』

吉『お名は何んと仰しやいます』

女『春と申します』

吉『えゝッ』

と驚き、名主の娘がおはる、又年が同年で、然もあの時のおはるさんの姿子が鼠縮緬すがぬい蝶々紋の衣類、何うやら姿形が死んだおはるさんにそッくりだぜ、えゝ氣の迷ひだ其樣な事が有る物かきッと心の迷ひだと思ひ直しまして、

吉『ねへお嬢さん、貴女は實にお美しう入らつしやるが此まゝお別れ申しますと私は焦れて死んで仕まいますよ』

女『妾の樣な者に構手なんぞ有る物ですか、御戯談ばかり』

吉『戯談所じやア有りません眞劍ですよ、こう言ふと可笑しいが私も元より仲間じやアござりません國へ歸れば立派な家の息子樣、貴女が云とさへ言つてお呉んなさりやアこんな嬉しい事はござりよせん』

女『それでは貴郎は眞實に妾を思つて下さりますの……』

吉『何で虚を言ひませう、宜しければ今夜貴女の所へ參りませう』

女『いえ、妾の所へ入らつしやるのは不都合のでございます故、妾が貴郎の方へ參りませう』

吉『そうですか、そんなら平岡の門番所に居りますから急度來て下さいよ』

女『天龍寺の八ッの鐘を相圖に參りますよ』

と其まゝ別れて屋敷へ歸つて參りました、山田作太夫の所へ先方の口上を述べ仲間部屋へ歸つて參りました。

吉『時にお前達に聞くが門番が居ないので皆なが替り〳〵門番をするのだが、各自に嫌やがるが何う云ふ譯なのだ』

一同『此屋敷ぐらい五月蠅屋敷はない、御表は武藝の先生方が來るし御奥は又花だの茶の湯だのといろ〳〵の師匠が出入をする、門番を言ひ付かつた日にや急がしくつて何も出來やアしない』

吉『夫れでは今夜から己れが一人で引受け樣じやアないか』

一同『そいつは有難い、何分に頼む』

とこれから吉平は面番所へ移り酒肴抔を拵へ支度をして待つて居りますると、丁度四ッ谷天龍寺の八ッの鐘がボン〳〵と鳴り渡りますと門の扉を、トン〳〵〳〵源次郎さん〳〵』

吉『お嬢さんですか、今開けますよ』

と開ける途端に燈火がパッと消へる、上り鼻にお春は腰を掛けて居て、

女『源次郎さん、今晩は大きに遅くなりまして濟みません』

吉『お嬢さんお上りなさい、今燈火を附けますから』

女『闇い方が宜うございます、燈火を附けるなら妾は歸りますわ』

吉『夫じやア燈けません』

と言つたが、吉平心中にハテなおかしいわい、源次郎と云つたのは國に居た時分の名で、江戸へ來てからは吉平と改めたのだ、それを己れの前名を始めて逢ふたお嬢さんが知つて居るのは不思議だそれに此の闇夜で己れの衣類の縞柄さへ判らぬのにお嬢さんの姿がはつきりと見へるのは餘程訝しい、これは不思議だ、とは思ひましたが、そこが煩惱とやらで、とう〳〵怪しき夢を結びました是よりして毎夜〳〵お春と云ふ女が泊りに參りまする、至つて親切な者で來る度毎に玉子菓子又は紙手拭煙草などといろ〳〵の物を持つて來てくれますから、吉平も實意の有る者と悦こんで居りますと、結構な袂落し銀の延べの煙管なぞを呉れましたから是を何時も持つて居りました。すると爰に御主人平岡强太郎殿が十一代將軍家齊公より拜領の御煙草入と云ふは、蜀紅錦の袂落し銀の唐草彫の煙管、此品が紛失したと云ふので家中大騒き其吟味をして居りますと、右の吉平が持つて居りましたゆへ、直ぐに庭先へ呼出して尋ねまする。

用人『其方所持の煙草入は殿が上様より拜領の品だ夫を其方が如何致して所持して居る』

吉『是は私の戀女から貰ひました』

用人『其女と申すは何所の女だ』

吉『お春と申ますが、何所だか家は申しません』

用人『僞りを申すな、己れが言替した女の家を知らん奴が有るか、其方が奥へ忍び入り盜み取つたので有らう』

吉『中々そんな譯ではございません』

用人『して何うしてその女と心安く相なつたのだ』

吉『へイ此六月の末で御用人様の御使で三番町の木村様へ參りました事がございましたな』

用人『左樣此方の使に遣はした事が有つた』

吉『彼の時丁度歸つて參りましたのが暮方新宿の中田圃まで來ますとその女が新屋敷まで歸るのだが、此の雨で難義をするから一緒に傘の中へ入れて貰ひたいと頼みますから、傘の中へ入れてやりました』

用人『それは親切なことである、夫れから如何いたした』

吉『だん〳〵話しを致しながら參りまして……』

用人『はつきり申せ、何うしたと云ふのだ』

吉『へイ、ムニヤ〳〵』

用人『なんだ』
吉『餘り能い女でございますから、ツイ口説ましたので……』
用人『酷い奴だな』
吉『そうすると女の申しますのには、貴方の樣な樣子の宜い男振りの宜いお方と一緒に成れるなら一日片時でも』
用人『これ〳〵何を云ふ』
吉『夫れから毎晩面番所へ泊りに參りますので、そのお春と云ふ女から貰ひましたのに相違ございません』
用人『何所の者か判りもせん者を面番所へ引入れるとは不埒な奴ぢや、何所の者だか分らぬのか』

吉『新屋敷中聞合せましたが、何所にもお春と云ふ娘はないと云ふ事でございます』
用人『夫は怪しい』
吉『夫れにまだ怪しい事がございます、源次郎と云つたのは國に居た時の名前で江戸へ出てから吉平と申しまして、夫れを初めて逢つたお春さんが源次郎さん〳〵と云ふので、まだお怪しなことがございます、戸を叩くから明けやうとすると心張棒がかつて有るのに外から戸を明けて這入つて參ります』
用人『そりや大に怪しい』
殿『作太夫今晩其方が面番所へ參うて怪女が來るか來ぬか見届け參

れ、來れば眞實だが、參らんければ此奴僞りを申すのである、何れとも見屆け申付る』

用人『畏り奉る』

と靑く成つて居りまする所へ麴町五丁目に町道場を開き一刀流の劍術を指南致して居りまする、奥州中村相馬の浪士榎本久治、平岡家へ御出入を致して居る者で只今是へ來て居りましたが、

久『如何でござります、其怪物見屆の役某へ仰付下さらば有難き次第修業の一つにも相なりますれば何分にも願たうございます』

殿『左樣なれは榎本氏何分に願ひます』

久『委細承知仕りました』

と是から夜に至つて面番所へ參り壁際へ座し、近江守忠綱の大刀を引付て控へて居りました。

吉『先生御苦勞樣でございます』

久『何時に來るな』

吉『天龍寺の八ッの鐘を打つて參りますで七ッを打つと直ぐ歸ります』

久『そうかお前は寢なさい』

吉『それでは御免下さい』

と横になつたかと思ふとウムーーとうなされるから。

久『大層うなされて居るではないか』
吉『今お嬢さんが參りました』
久『その春と云ふ女が來たのか』
吉『へイ、只今參りましたので……』
久『そうかよし〳〵さア今一度寢ろ』
吉『じや御免なさい』
と又寢ると暫くしてから又、ウンーン、
久『扨は怪物來り居るか』
と向ふを見ると上り端の手にボンヤリ女の姿が見へるから、己れと
忠綱の一刀拔打に、パット横に拂へばパット姿は消へた途端に久治

の顔へ何か掛つたから、是はと思ふ内に取逃しました。
久『吉平燈火を付けろ』
と燈火を附けさせ、能く〳〵見ると手拭であります。
吉『この手拭はお嬢さんが吹流しに冠つて來たのでございます』
久『ハヽアさうか、全く怪物は來るな』
吉『參りますでせうな』
と云つて居りますと雨戸をトン〳〵〳〵源次郎さん源次郎さん〳〵
吉『先生又來ました』
久『これ吉平ッット開けろ』
吉『宜うございますか』

とがらりと戸を開けると女が立つて居ましたゆへ久治は一刀の下に切つて落しました。

久『締た、吉平切落したぞ』

吉『そいつはごうぎで、やア先生いけません、御家敷内のムク犬でございますよ』

久『え、犬だと、ム、ウ扨は怪物、この榎本久治をたぶらかすか、此上は吉平はさて置き、怪物を退治せずんば榎本久治の武士道が立たぬ』

と大層くやしがりまして、それより榎本久治は両三夜引續き面番所に來り、見屆けの上退治して呉れんと思ひましたに妖怪の爲に重ね重ね化かされ討取ること出來ず、これが爲め平岡の屋敷は門止となり剰さへ吉平とても暇を出されましたから、久治は如何にも口惜しく此上は、いかにもして討取つて呉れんと毎夜新宿界隈を附け廻つて居りました、爰に四ツ谷御假屋横町に大工の鐵五郎と云ふ者が有つて新宿の女郎屋、豊倉屋のお花と云ふ女に馴染を重ねて通つて居りました、或夜痴話喧嘩をして夜中に飛出して仕舞ひましたが、最早夜の八ツ時分流石に一軒も明いて居る家はございませんから仕方なく歸らうと新宿の大木戸迄參りますと木戸際より一人の女がパラパラと駈け出して來まして。

女『若し〳〵少し御聞申しとうございます』

鐵『ヘイ、姉さん何んでございます』
女『私は御假屋横町まで參りたいと思ひますが、御教へなさいませ』
鐵『ハアさうですか、丁度私はその御假屋横町まで參りますので、御一緒にお連れ申しませう』
女『夫れは御親切に有難うございます、何卒お願申します』
鐵『御假屋横町は何地へ御出です』
女『アノ人入渡世の上總屋五郎兵衛と申します宅までまゐります』
鐵『その上總屋五郎兵衛と云ふのは、私の宅の表の家だ』
女『左様でございますか』
鐵『さア姉さん是れが上總屋さんの宅だ、御待ちなさい私が叩いて

起して上げませう』
女『有難うございます』
ドン〳〵、と叩いて、
鐵『オイ五郎兵衛さん、一寸開けてお呉んなさい大工の鐵ですよ』
五『鐵さんですか、最う寢て終ひましたから用が有るなら翌朝にしてお呉んなさいな』
鐵『今夜でなければ不可ぬのだ』
五『何んだ今開けるよ』
起きて、門戸を開けて、
五『鐵さん何んだへ』

鐵『私が用が有るのぢやない、大木戸から一緒に來た姉さんが、御前の所へ用が有つて來なすッたのだ』

五『ヘイ其の姉さんと云ふのは何處に』

鐵『何處にッて爰に』

と見ると誰れも居ない。

鐵『おや〳〵妙だねーどうしたんだらう』

五『鐵さん戯談じやないぜ、能い加減にしなさい何處からか遲く歸つて來なすつて、木戸が締つて居る物だから、そんな事を云つて己れを起して開けさせやうと云ふのだらう』

鐵『左樣ぢやアない、眞實に來たのだ』

五『何所に女が居る』

鐵『ハテ困るなア、オイ姉さん隱れては困るよ』

と言つて居る所へ、バラ〳〵と駈來つた一人の武士。

武『コレ〳〵靜かに致せ』

と這入つて來た。

五『オイ鐵さんお前はマア夜盗の提灯持をしなくつても宜いではないか、おまけに私共の樣な貧乏人の所へ伴れて來たッて仕方がないぢやアないか』

鐵『戯談じやアないぜ、夜盗の提灯持なぞするものか』

武『ア、是々、心配いたすな、身共はそんな者ではない榎本久治と

云ふ者だ、今新宿の大木戸まで來ると二人の男女打ち連れて行く様子、男の方は判然と分らぬが女の方は姿があり〳〵と見へる、ハテ不思議と跡を尾けて參つたもの、當家の二階に平岡の仲間吉平と申す者が居るであらうがな』

五『左樣でござります、御暇になりまして、私方へ引取つて參りました、二階に寢て居ります』

久『只今の女は其の吉平の所へ參つたのだ』

五『ヘイ、何處から上りましたね』

久『此の庇に上り二階の窓よりスーッと這入つたのを見屆て居る』

五『エ、、、鐵さんお前は生涯恨むせ、己れの内へ化物なんぞ引張つて來て』

鐵『戯談云つちや不可ません、己が伴れて來るものか向から尾いて來たのだ』

久『騷ぐな拙者が退治して呉れるから、二階へ案内をして呉れ』

五『何卒此方へ御上り下さいまし、サア嬶ア起きないか、蚊張を取らないかよ、化物が舞ひ込んで來たんだ』

女『マア大變だねえ』

五『オイ鐵さん何んで金盥を被るのだい』

鐵『もしも化物が二階から飛び下りて來たら、頭から喰ひ付かれると大變だ』

五『成程此奴ア宜い考へだ、俺も釜を冠るから婦ア お前は鍋を冠れよ』

と大騒ぎ此方は、榎本久治、襷鉢巻袴の股立を取り上げ一閑子近江守忠綱の大刀を引提げ二階へ駈け登る、時は寛政七年八月二十六日の夜、窓の戸を開け放して紙帳を吊つて寝ております、榎本久治は大刀をスラリと抜拂つて紙帳の四隅の吊手をパラリと切つて落し、刀の切先にて紙帳を拂ひ退けて見ると、コハ如何に吉平は咽喉笛を喰ひ裂かれ血に染んで死んで居ります。之れはと思ふ間に横合の方から冷水を浴せかけられるやうな風がぞッと吹くかと思へば、久治を望んで飛び掛つたる怪猫、両眼は明星の如く、耳は口まで裂け、

銀鎌の如き爪を剝き見るも恐ろしき有様、

久『己れ妖怪御参なれ、萬物の長たる人物へ害を加へる憎き畜生、今宵はいかで遁すべきや、此の一刀を受けて往生しろ』

と打込む下を掻潜り、又も拂へば飛び開き、縦横無盡に飛廻るを、爰に薙立彼處に追詰め、疊掛け疊み掛け切り下す一刀に左しも神變自在の怪猫も運命こゝに究まつて遂に落命を致しました、久治はホッと息を吐き。

久『コレ〳〵主人皆の者参つて呉れ』

と呼び立てますれば、下では五郎兵衛を始め皆々ぶる〳〵震へて居りまして、生きた心地もございませんでしたが、呼ばれますから恐

恐上つて見ると驚いた。

五『旦那是りやア大變でございますな、何うした物でございませうな』

久『是は拙者が平岡の屋敷へ届けるから、お前の方では明朝町奉行所へ届けなさい、且又吉平の國元へ沙汰を致したら宜からう』

五『へイ畏りました。それでは左様致しませう』

と爰で翌朝町奉行所へ訴へ出でました。

依て町奉行の役人は出張致しまして、吉平の死體檢使相濟五郎兵衛へ御渡しに成つて役人等は引揚げました、處へ此沙汰を聞いて、吉平の兄源太郎も驚いて出府致し、上總屋方へ參り萬事の話を聞き

それに付て國元にて云々斯々の次第にて名主喜兵衛の娘お春が非業の最後を遂げて國元に於ても御詮議中の者、斯る死を遂げるも自業自得致し方はございませんと一伍一什の物語、死體は荼毘の煙といたしまして、白骨を背負つて歸國いたしました、榎本久治は、畜生とは言ひながら主人の恨を報した猫のことでございますから厚く葬つて遣はしました、此事主家へ聞へ元高にて相馬家へ歸參と相なりました。爰に前に申し述べましたる碁打ちの高橋鎮太郎が再び上總の金置村に參りましたる節、此の事を承り元々自分より起りたる事件でございますから、江戸へ參りまして、榎本久治に對面をいたしまして、何うかこの猫の骸は手前が申請けて國元のお春の片傍に

埋めて遣りたうございますから何分にも骸を申請けたいと申しますので榎本久治も尤もと思ひ早速猫の骸を堀覆して遣はしました、高橋鎭太郎は、是を携へて金置村へ參り長久寺へお春の墓と並べて葬りました、人呼んで、上總金置村の猫塚と申し傳へましたが、因果應報の理り、實に恐るべき事でございます。

■佐倉怪談　俳優と因果の死靈

＝亡靈集れて附き纏ふ＝

明治初年頃であつた、旅役者の一行が下總の佐倉へ乘り込んで豐年祝ひを當て込んで大黑座に於て興行することゝなつた。何がサテ若手揃ひの一座の顏見世があつたから、それに例年に一寸稀れな豐作である年であつたので、來るは〳〵町内の男女は申すまでもなく遠近の村々の老幼まで腰辨當で出で來る有樣であつた。太夫元はホク〳〵ものでいよ〳〵蓋を開けた、サア成程上景氣、藝題は所柄と『義民傳佐倉宗吾郎妻子別離』を初に演る事にして中へ『熊谷陣屋』を据へ切に『五人男』と云ふ土地相應な出し物で、初日、二日三日四日と評判も極上、いよ〳〵後三日と云ふ事になつた。處が四日ながら續いて棧敷へ陣取つた美人があつた、乳母かお附きか年は四十六七にもと思ふ婦人を一人連れて同じ樣にやつて來ては、ヤレ祝儀、ソレ心附と一座の中の河原崎國太郎と云ふ女形に入れ揚げて居た。

其の美人はと見ると年の頃なら二九からぬ花の顔月の眉、風にも靡かん風情にて何づれは大家のお嬢様か、豪家の娘子かと思はれたが何處を何うして首尾をしたものか、遂に割なき仲になつた、國太郎は今迄でに他の土地々々でも可愛がられた方ではあるが、今此の初々しい世馴れぬ風情に接し自分からも以來は殆んど夢中の有様になつた。

所が七日間の興行も無事に終つていよ〳〵明日からは旅より旅へ廻る身となりましたが、思へば美人ではあるもの、未だ世間見ず、役者の嬶になる柄ではなし、それに聞けば家つきの一人娘の事であれば尚更此の儘に何時迄も續くべき婦人でもないと考へていよ〳〵

一週間目の打上げの晩、例の家へ落ち合つていよ〳〵と因果も含めたのであつたが、思ひ込んだ女の一念なか〳〵に諾とは云はず、崩れた髪を左右に振つて、何うしても此の儘に分れるのは嫌やだとサメ〴〵と泣き口説くのであつた、そうして娘は、

『此の儘に分れる位ならば私は貴郎の膝に抱かれ今此の場で死んだ方が宜い』

と云ふ樣な言も云ふた、國太郎も斯うまで云はれて見ると最初から滿更でないと打込んだ身の、それでもとも施す手段がなかつた。仕方がないからソレならば明朝早くに國太郎の宿まで來るやうにと打合はせをして互に其の夜は別れた。

翌朝になると娘はやつて來た、國大郎も一座の者に打ち明けて自分丈け早朝の列車で次ぎ興行の土地まで先きに行く事になつた、

娘の方も萬事は乳母の手引き、目星しい衣類は小行李に入れて、路用萬端の粹をきかし娘より先きに昨夜の約束通停車場へ送つて置いた。

サア支度はよし、機もよしと國太郎は相乘り車のホロ深く停車場へ着いたのは一番發の列車にまだ二十分ばかり前の時間であつたので、二人はビク〳〵もので待合室の一隅に身を置いた。

娘が見へぬので、さなくも両親は世に亡き後は兄の監督ぞと常々に口にして居たのに近頃何うした事かと……幾分は注意の折柄とて家中は忽ち大騒動、ソレ東へ、誰れは西をと多くの出入の人々までが騒ぎ立て駈け廻りたる結果は忽ち發車時間に今！拾分……發見された二人は生木を裂く有様、僅か十分間の差と思ふ心の娘は泣きわめく聲に情も荒男の子の手に擁護せられて元來し路をまつしぐら、男戀しと泣く思ひは同じ國太郎後慕へども詮方もなく、餘りに両人の語らひいのち生命の短かかりしに開いた口さへ塞がらず、されど懐中に殘る五十両、マヽヨ明日を定めぬ旅がらすと思ひ直せば如露如電、日を重ねて居る内に此の娘の名さへも遂に打ち忘れるやうに成つた。

河原崎國太郎は其の後も例の旅俳優、廻ぐるは因果の小車か、思

ひ出せば十四、五年後に國太郎はまた久方振りにて其の藝名も國三郎と名乘り、妻子を連れて再びこの土地へ興行に來たのである、早くも五日間の興行も相變はらず大入滿員の上々吉で打上げる五日目の日、國三郎は朝目覺めて手洗に出行かんものと立ち上りしに如何したものかゾク〳〵と惡感を催して、時間の經につれて熱さへ出て來たのであつた、が後一日の今日限りの興行故、後の療治は引受けるからとの强つての大夫もとからの話しに出演した所で三役だけ、辛くも勤めたのである。サア其の晩から熱は四十度位もあるやうな容体になつて、座方、妻子の人々は申すまでもなく非常に心配して居つたのである。

所がサシもの大熱も醫師の投藥の甲斐か翌朝にはケロリと忘れし如く全快の樣子、本人も夢かと欣びながらも今日の出發を見合はして一両日後より次へ行くべしと約束して、妻子の者も先發にやり病軀を一人國三郎は旅舍に横たへてゐた。

それから明日も此のまゝならば次ぎへ立たんものと思ひしに其の日になると不思議や前々日の樣子と少の異りなき容体となり夜に入りては益〳〵發熱甚だしく、うめき居る間にも天井の一隅を見つめて俄破と跳ね起き、

「あゝ惡るかつた〳〵、今から行きます、其樣に足を引張ると仆れる〳〵」

と、口走りながら床の上へバタリ仆れる、物音に驚いて宿の者が來て見ると、この有様苦しみながらも目をむき出し睨む恐ろしさ、思はず女中も、

『キャーッ』

と、驚き階下へ飛び下りる有様……そうするかと思ふと曉方からスヤ〳〵と眠りに付き朝になると前日の有様にケロリとして忘れたるか如く、斯様な不思議な病氣に取り着かれたる事とて躰軀は衰弱して十日ばかり經つ内には早や骨と皮ばかりの見るも哀れな慘な様になつた。

で或る日の事妻子に宛て、急使を馳せらした、吃驚して忰と母とは來て見ると今スヤ〳〵と寢て居た國三郎が例の通り痩せ衰へた身体を俄破と飛び起き天井の一隅を凝視て、

『ア、惡るかつた〳〵、今から行きます、其様に足を引つ張ると仆れる〳〵』

と口走つては、ヒヨロ〳〵と一と歩か二た歩で直にバタリ仆れる有様、其の物凄さ加減、思はず妻子もブル〳〵と慄い出し、

『お父うさん〳〵私ですよ』

と忰が揺り起すと、病人は漸くに目を見開て、

『オウ來たか、私しやモウ駄目だ、が今期の際に一言云ひ遺したいことがある、外でもないが私が未だ若い時分に此の土地へ來て

十四、五年前に興行した事がある、所が其の頃此の土地の豪家の娘と出來合ひ、其の娘を欺して駈落仕様とする所を家の者に見付けられ、娘は引き戻される私は旅から旅へ出た、其の時分娘からは夜となく日となく艶書の矢、私も可哀想とは考へたが今爰でなま中の返事を出してはと、情なくも只の一度も返事を出した事とてはなかつた、ところが其の娘は風の便りに聞くととう〳〵焦れ詰めて狂ひ出して彼の世へ逝つたと聞いた時は悪るい事をしたと考へたものゝそれ限りで忘れて仕舞ひ、今度再び此の土地へ來ていろ〳〵様子を聞くと娘の墓所は遂の裏山と聞いたが、一日置きに此の部屋へやつて來ては私を怨んで様々の繰言「貴郎も何うか一所に逝つて呉れ〳〵」と手引き足引きされる悲しさ、モウ私も逝かなきやならぬ身の上であるから、せめて今一と目と思ひ悴の事も氣に懸るから呼びにやつたやうな次第じや……アレ〳〵向ふから……アレ〳〵また來た……』

と亦もや俄破と跳ね起きヒヨロ〳〵と二三歩、バタリ其の場に倒れたかと思ふと、

『あゝ悪るかつた、モウ永く待たせました……』

と云ふかと見る間に俄かに痩せ衰へた病人の顔からは油汗が滲み出して苦悶の有様、親子二人は見る眼も怖々ながら末期の手向けをすると、視力の欠けた眼を両人の方へ向けて、

『そんならモウ別れだ、行つて來るぞよ……』

と云ふ聲も後は次第に聞き得ざる迄になり、一秒毎に吐く息も消ゐて顔は次第〳〵に骸と化して來たかと兩人が今更ながら別離の涙湧く瞬間、部室の一隅に何處ともなく、

『ヒ、、、、』

と女の笑ひ聲が洩れた。

戸外には風も無きに落葉重ねる音か……。

怪談くらべ（終）

178
1177

怪談叢書

怪談くらべ
怪談美人揃
怪談百物語
怪談雨夜の風

定價　各廿五錢

大正六年六月二十日印刷
大正六年六月廿五日發行　定價二十五錢

著者　增進堂編輯部

（不許複製）

發行者　大阪市南區北炭屋町四十九番邸　岡本增次郎

印刷者　大阪市西區阿波座中通二丁目四番地　荒木佐兵衛

發賣元　大阪市南區四ツ橋東南詰南へ入　岡本增進堂

『そんならモウ別れだ、行つて來るぞよ……』

と云ふ聲も後は次第に聞き得ざる迄になり、一秒毎に吐く息も消わて顔は次第〳〵に骸と化して來たかと両人が今更ながら別離の涙湧く瞬間、部室の一隅に何處ともなく、

『ヒ、、、、』

と女の笑ひ聲が洩れた。

戸外には風も無きに落葉重ねる音か……。

怪談くらべ（終）

■怪談叢書■

怪談くらべ
怪談美人揃
怪談百物語
怪談雨夜の風

定價　各廿五錢

■以下續刊■

大正六年六月二十日印刷
大正六年六月廿五日發行　定價二十五錢

著者　增進堂編輯部

（不許複製）

發行者　大阪市南區北炭屋町四十九番地　岡本增次郎

印刷者　大阪市西區阿波座中通二丁目四番地　荒木佐兵衛

發賣元　大阪市南區四ツ橋東南詰南へ入　岡本增進堂　振替大八四四九　電話南四一三

終